

# 伊那谷スケッチ

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第二十二回



オオシカ谷青木集落の高台から清水集落付近を望む。手前の山の尾根の所まで黄金色に輝いていたという

前島久美

畑の麦の穂が出たのは、田植えが終わった6月の中頃だった。

普通だったら5月には穂が出て、6月に色づき収穫となるはずなのだが、冬に鹿に食べられてしまったので成長が遅れていた。田植えの時などは、通りがかりの村人に「ありゃあ麦か！？ 穂が出とらんじゃねーか、ケール（青汁）にしちまったほうがいいら」などと言われた。それでも花瓶に生けて楽しむくらいにはなると思い、そのままにしていた。今、畑の麦は実を結び、色づき始めている。麦の生命力は凄ましい。

今日は7月に入ってから初めてまともに夏らしい陽射しが注いでいる。長らく雨が断続的に降り、肌寒いくらいの日が続いていたので、有難い。とはいえこの突然の日差しに慣れるまで少し時間がかかりそう。頭がクラクラして痛いくらい。そんなことも言っていられないので朝、野菜の収穫に出かける。いつも野菜の収穫をさせていただく紙谷正さんを訪ねて一緒にキャベツ畑で手を動かしながら、麦畑の話をつてみた。彼は村1軒の養蚕農家で現役バリバリの89歳だ。「ここも麦畑だったんでしょう？」「ああ、そうだ。上から下まで麦畑な」「何か懐かしい思い出はないですか？」と尋ねたら、彼は曲げていた腰をのぼしながら「おそろしい」とひと言いつた。作業が大変で思い出すのも嫌なのかと思ってよく聞いてみると、麦の脱穀の日（当時は7月下旬だったようだ）に家の人を振り切って赤石岳（赤石山

地の盟主)に登ったということで、なにやら帰宅してからが大変だったとか。

7月下旬と言えば梅雨明けして、何とも言えない解放感がある時期だ。確かに山に呼ばれる時がある。私もその手の人間なので共感してしまった。山の懐に暮らしていると里の営みをほっぽりだして上流(山)を歩きたくなる日が定期的に訪れるのは、私だけではない。これは、下流と上流をつなぐ必要不可欠なコミュニケーションであると最近では認識している。

「山に行かなきゃ」と思った時に、すでに「山」は私たちに対話を求めてきている。そういう時は、思いきって出かけてしまったほうがいい。

## 「風景」でつなぐ 山村のココロと食文化

私は、麦の成長過程が好きだ。生き物たちが息を潜める冬に大地に根付き、青々とした葉を出す。春先、「一足お先に♪」と言わんばかりにすくすくと成長し、夏には黄金色になって、収穫を迎えるのだ。

ここ信州・オオシカ谷では、かつて大豆と麦の二毛作を行っていた。すべてが自家用で栽培されていたようだ。10月、大豆を収穫して焼畑をし、11月に麦を蒔き、麦が色づく5月20日頃、麦の畝の間に大豆を蒔いていく。オオシカ谷の畑には1年間ずっと作物が根付いている風景が常であった。

オオシカ谷・大河原集落の真ん中を流れる小渋川の右岸の高台に立って対岸の集落を見ながら、村の古老と話をすると、かつては、集落の上の山の頂上あたりまで黄金色だったという。オオシカ谷はどこもほとんど傾斜地にある。よって、傾斜地の独特の畝のひき方の技術も今に伝わる。下から上に土を引き上げるように畝をひかないと土が下に落ちるので「逆さうない」という特別な技法が村にはある。

一見、作物の栽培には向かないような場所でさえ、一面、桑畑と麦・大豆の畑が広がっていた。今は植樹された針葉樹が点在しているが、集落内の林は極わずかだったという。そんな風景も昭和36年の梅雨前線豪雨(通称36(さんろく)災害)を機に姿を消していくことになる。

かつて、この谷の風景を作っていた作物に興味があり、私の畑では昔ながらの麦と大豆

の二毛作の実践を始め、6年目を迎える。始めてみると小麦を使った郷土食は信州には多いが、近所に麦畑は見られないのはなぜ?そんな疑問も湧いてきた。育ててみると海外小麦に依存するのも納得。口にするまでの「過酷な労働」はそうそう味わえるものではない。収穫しても、脱穀、そして製粉に至るまで時期を逃すとそのまま年を越してしまうことも多々ある。また麦と大豆の組み合わせは、味噌、醤油といった日本に欠かせない発酵食品の原料ということもあり、この昔ながらの「風景造形大作戦」とともに栽培を続けることに意義を感じている。

ここ数年、種を蒔いても鹿の食害で収穫に至らないことが続いた。昔の風景を作るという初期の動機を考えると不本意ではあるが、今年は畑の周りを柵で囲ってみた。今シーズンは大豆も麦も収穫できそうだ。そして昔ながらの「過酷な労働」が待っている。

かつての風景に想いを馳せる。

冬枯れた無彩色の世界の中に、あの麦の青々と育つ姿は人を元気づけていたのではないか。辺りが雪で覆われたとしても、その下に命があると思えば春を待つ楽しみがある。季節が移り、周りがいよいよ緑濃くなる初夏には黄金色に色づいて「麦秋」がやってくる。あの美しさと充足感は長らくそこにあった「風景」だから、なおさら「チカラ」がある。その「風景」を目にした人の内側に自発的にボワンと浮かんでくる「オオシカ谷はいいな」と想わせる「チカラ」だ。

大きな公共事業が再び村の風景を変えよ

うとしている今、どんな活動よりもこの小さな風景を守っていくことこそが大切なのではないかとさえ思う。